

情報提供はサケ死骸消費者に対する認識を変える？

—都市での腐肉食機能保全に向けて—

環境資源学専攻 森林・緑地管理学講座 森林生態系管理学 伴 遼太郎

1. はじめに

動物の死骸を消費する哺乳類・鳥類（腐肉食者）の機能（腐肉食機能）は食物網の安定化や栄養塩分散を通じて都市の自然環境の維持に貢献すると考えられる。また、腐肉食機能自体も、悪臭軽減、疾病抑制など、様々な生態系サービスをもたらす。そのため、都市において腐肉食機能を保全する意義は大きい。都市の腐肉食者の種構成については知見が限られている。一方、都市において腐肉食者が住民から嫌悪され、駆除を望まれる可能性もあるため、都市住民の認識や許容度といった社会的側面を把握し、保全策を検討することが必要だと考えられる。人々の保全意識を変化させる手段として、野生動物の生態や役割等に関する情報提供が注目されつつあるが、情報提供が腐肉食者に対する都市住民の認識や許容度にどのような影響を与えるかは明らかになっていない。そこで、本研究では都市においてシロザケ (*Oncorhynchus keta*) 死骸を消費する腐肉食者を把握し、それらの腐肉食者に対する都市住民の認識や許容度と、腐肉食機能に関する情報提供がそれらの認識や許容度に与える影響を明らかにすることを目的とした。

2. 方法と結果

札幌市豊平川周辺計 12 地点において、2017 年 10 月～12 月に自動撮影カメラとシロザケ死骸を用いて腐肉食者調査を行った。その結果、アカギツネ (*Vulpes vulpes*)、カラス属 (*Corvus spp.*)、タヌキ (*Nyctereutes procyonoides*) が腐肉食者であると認められた。

上記の腐肉食者に対する都市住民の認識・許容度、および情報提供の影響を明らかにするため、2018 年 9 月～10 月にアンケート調査を実施した。調査は豊平川周辺の緑地で行い、腐肉食機能に関する情報を提供していないアンケート（情報無版）と提供したアンケート（情報有版）を 200 部ずつ配布した。アンケートでは、各腐肉食者について認識・許容度に関する 7 種類の質問に 5 段階評価で回答して頂いた。配布したアンケートのうち、情報無版 128 部、情報有版 112 部を回収できた。情報無版を対象に **ordinal logit regression** モデルを用いた解析で認識・許容度を種間で比較した結果、カラス属は他の 2 種に比べてマイナスの認識を持たれており、許容度についてはアカギツネで特に高くなっていた。両アンケートを対象に **ordinal logit regression** モデルを用いた解析で情報提供の影響を評価した結果、全ての質問で情報提供により認識や許容度が向上する傾向が見られた。また、他の 2 種に比べカラス属は多くの質問で有意に認識が向上していた。

3. 考察

アカギツネやタヌキは形態・分類学的特徴や文化的な馴染み深さが好ましさにつながり、カラス属は人間との軋轢がマイナスの認識や許容度につながったと考えられる。またカラス属はもともと好ましく思われていないため、情報提供による認識の向上が顕著だったのだろう。本研究から情報提供が認識・許容度の向上に寄与することが示されたが、その効果が小さい場合もあり、提供する情報の質や種類について更なる検討が求められる。